

まえがき

『オレスティア三部作』は、トロイア戦争から帰還したアガメムノン王が、王妃クリュタイメーストラーの手にかかって非業の死を遂げる第一部『アガメムノン』と、王妃が成人した息子オレステースの復讐を受けて殺される第二部『コエーポロイ』、そしてそのオレステースが母殺しの罪をアテーナイの法廷で裁かれて放免される第三部『エウメニデス』とから成り立っている。しかしこの第一部は、その1、673行にも上る長篇の約4/5にあたる1、342行までが物語の導入部ともいべき「アウリスのイーピゲネイア」と「カッサンドラーの死」の物語によって占められていて、本来の主題であるはずの「アガメムノン暗殺」の場面は劇の最後の1/5で扱われているに過ぎない。だからこの第一部の内容を論ずる際にも少くともこの三つのエピソードに分けて考える必要がある。アガメムノン暗殺は、「ゼウスの讃歌」と「正義の讃歌」によって傲り昂る者が神と人の怒りを身に受けて滅びることの必然が示され、劇的緊張が高揚した場面で舞台の背後において実行されるのであり、それらの三つの物語は一貫して視野の中に収められなければならない。ところでこの小論は第一部の最後に置かれたアガメムノン暗殺の物語を、その場面においてコロスと王妃の間で行われた問答を中心にして考察し、その中から浮び上って来る王妃の性格とその自己主張を明らかにして、それが第二部における王妃殺害に連なる布石となっていることを指摘しようとするものである。王妃が王への憎しみを露わにし、自己の行為の正当性を主張すればするほど、それがまた自分の破滅を用意し自己への報復となっではね返って来るという構造を論証しようとするのである。コロスの引用文はできるだけ韻文に近い訳を試みているが、それは原文の味わいと比喩の用法を表現するためにはこれが最も適していると考えからである。本論は「アガメムノン」における「正義の讃歌」の研究の続篇である⁽¹⁾。

本文

『アガメムノン』の前書きとカッサンドラーの死についての考察は先の論文で述べておいた⁽²⁾。その前書きの中に「— 特にアイスキュロスは、アガメムノンが舞台の上で殺されるように(劇を)作り、カッサンドラーの黙せる死は彼女の死んだ姿で表わした。そしてアイギ

ストスとクリュタイメーストラーに関しては、クリュタイメーストラーはイーピゲネイアの殺害について、アイギストスはアトレウスによる父親の不幸について、各々がその殺人に関しての一つの要因であるとして(それぞれの立場の正当性を)断言するように作った。——』という一節がある。この前書きの中の一節は、第一部の第四スタシモン以下のアガメムノン暗殺場面とクリュタイメーストラーとアイギストス各人による弁明について要約した箇所であるが、これは実に簡潔にこの劇の構成と特質を要約している。すなわち、この劇の本来の筋から言えば、第一部はアガメムノンの暗殺とその行為の正当性の弁明が主題となっているということである。『オレスティア』は三部作という巨大な舞台の空間を得て、アトレウス家の悲劇を長い時間をかけて上演する為に、それぞれの劇の中に見せ場と中心人物を配置している。第一部においてはアガメムノン暗殺の必然性を盛り上げる為に罪なくして死ぬカッサンドラーと、更にまたイーピゲネイアを舞台の外に重要な登場人物として用いている。しかし三部作の視点から見るなら、アガメムノンと王妃クリュタイメーストラーが当然この劇の中心人物である。その点で前書きのこの節は、今から述べようとする「王妃の正義とその罪」の背景を非常に簡潔にまた適確に指摘していると思うのである。劇の各場面を追ってこの点を見ていこう。

・悲劇の予感

王暗殺の場面に至るまでの『アガメムノン』の前半は迫り来る破局を予感させる重苦しい気分と不吉なことばに満ちているが、劇の冒頭に登場して王宮の屋上で見張りの任務に就く番兵の独白にはとりわけそれが著しい。彼はトロイア陥落を報せる烽火の合図を待ち侘びながらも、現在王宮を支配している陰うつな陰謀の気配とそれに対する懸念を口に表わす。この烽火による連絡も王の命令によるのではなく、王の帰還を一刻も早く知って陰謀の手筈を整えようとする王妃の企みによるものであるから、番兵の危惧も根拠の無いものではない。

番兵「神々に乞い求めるのは この苦役から放たれることだ、
一年の長きにわたるこの見張りから、
アトレウスの館の屋根に肘をついたまま
犬のように伏せている間に、夜々昇る
星の形も覚えてしまった、夏冬をもたらず
輝やきわたる星の諸侯が 空高く際立つ様子を、
昇ってはまた沈み消えていくその時も。

今もまた見張りに立って待つのは火の合図だ、
輝やく炎の報せがトロイアから
征服の便りをもたらして煌くのを、
女の身でありながら男のような謀みめぐらして
望む心がそれを命ずるのだ。
夜もすがら露に濡れそぼったこの臥床には、
夢の訪うこともなく 睡りに代えて立つ怖れが
目蓋を合わすことも許さないので、
歌をうたって口誦もうと望んでみても
眠気を紛らす唄の節を口の端に出すその度に
館の不幸が憂いに満ちて嘆く心に染み込んでいく、
昔のように館を立派に治める方も居られないので」。

(Ag.1-19)

このように彼が留守を預かる城館には、何か恐ろしい不吉な陰謀がめぐらされていることをほのめかした番兵は、勝利を告げる烽火の明かりを見て嬉しさに躍り上って歓声を挙げる。しかし次の瞬間には帰還した王を待ち受ける罟を思い起こしては、彼の心は重く沈み込んでしまう。彼は身の安全をおもんばかり自分の知っている秘密を心の奥深く蔵って、ただ事情に通じている者にだけ分る謎めかした言い方で事件をほのめかすのである。

「望みはひとつ 我が君がお帰りになり
懐かしいその御手を この手に取ることだ。
だが大きな牛がこの舌を踏みつけるから 余計な事には口を嚙もう。
この館がもし声を持つならば
残りなく語ってくれるだろう。
事情を知る者になら 進んで語ってもよいのだが
心疎い者には縁の無いことだ」。

(Ag. 34-39)

・ 王妃の陰謀とその原因

パロドスにおいて番兵が言及した陰謀とその原因は、十年前にギリシア軍がアウリスの浜にトロイア遠征軍の勢揃いをした時の事件に遡る。逆風に出陣を阻まれたアガメムノーンは預言者カルカスの占いに従い、女神アルテミスの怒を宥めて順風を吹き送ってもらう

為に、アキレウスと結婚させると偽り娘イーピゲネイアを呼び寄せて人身御供儀に捧げた。この事件は王妃の心に深い恨みを残し、それが王の帰国後に起きた暗殺事件の遠因となる。この点はこの犠牲について回顧するコロスの歌の中でも明確に強調されている。

「我は呼ばわる 医師なるパイアーンを
逆しまに吹く風に 船留めが
長引いて ダナオス人らが
船出のかなわぬことの無いように、
それは更に 掟に背き食べることもかなわぬ
生贄を迫り、一族が夫を軽んずる
諍いを作り為す原因となる。
怖ろしい家守りは去りやらずに
行く度となく立ち返り謀らんで
子の仇を討つ 瞋りを忘れない」

(Ag. 146-155)

イーピゲネイアの犠牲がもたらす恐るべき結果について、ギリシア軍に従う占師カルカースがこのように予言したとコロスは述べる。いかにギリシア軍の総大将としての責任ある立場に追られたのだとはいえ、このような「掟に背く犠牲 *anomos thysiai*」(Ag.151)はとうてい人倫の許すところではなく、王妃クリュタイメーストラの胸中に激しい憎悪を育ませ「夫を恐れぬ心 *ou deisenor*」(Ag.153)を深く潜ませた。この箇所はアトレウス家が代々繰り返す犯罪、タンタロスによるその子ペロプス殺害と供食、アトレウスによるテュエステースの子らの殺害と供食、そしてイーピゲネイアの供儀を指すのであって、「子の仇討ちを企む心 *menis teknopoinos*」(Ag.155)は父の恥をすすごうとするアイギストスの怒りをも含んでいるのである。しかしその中の最大の怒りがアガ멤ノーンに対する王妃の憎しみであるということは、この「夫を恐れぬ心」ということばが最も良く示している⁽³⁾。こうしてカルカースの予言の中には、王妃が王の不在中にアイギストスを愛人として共通の敵を倒す為に共謀するという経緯が予め示されている。

・陰謀の熟成とその言及（ほのめかし）

アガ멤ノーンが故国を留守にしてトロイアの地で戦っている間に、王妃はこの憎悪を

心に抱き続け、復讐の念を募らせていた。その思いは同じような復讐心を王に対して抱いている義理の従兄弟アイギストスに通じ、二人は王の帰国に備えて暗殺の陰謀を凝らすようになった。その準備の時を稼ぐために、誰よりも早く戦勝の報告を得ようとして王妃が手配した烽火による通信網は、期待どおりにトロイア陥落の報せを速やかに伝え、彼女はその吉報をアルゴスの長老たちにも知らせる。しかし彼女のことは、勝利の喜びを表わすよりもむしろ被征服者の苦しみと悲惨とを思いやって、蛮行への報いが勝利者の上に及ぶことを案ずるかのように不吉な意味合いを帯びている。「たとえ軍隊が神々に対して罪を犯さずに帰ろうとも、滅びた者たちの苦しみは目覚めているでしょう⁽⁴⁾、急には災いを受けることが無くとも。—しかし良きことが力を得て、見るもの定かならぬことの無いように。私は多くの喜びを味わうことを選んだのですから」(Ag.345-350)と王妃はこのように曖昧な言い回しではあるが、彼女が王に対する貞節を棄てて、勝利の犠牲となった娘のための復讐を心に固く誓っている様子がここにほのめかされている。

王妃の二重の意味を籠めた曖昧な謎めかした表現は、勝利を報告するために全軍に先んじて駆けつけた伝令に向って述べられる時に、更に不吉な復讐の意志を聴く者の耳に響かせる、「さてもうこれ以上どうして私にお前が語る必要があろうか？ 殿御自身から全ての話を私が聞こうというのに。我が慕いまつる君がお戻りになるのを、できるだけ急いでお迎えしよう。なぜなら妻にとってどのような日の輝きがこれよりも目に喜ばしいものであろうか、神のお護りによって遠征から帰った夫のために門を開くことよりも？このことを殿に伝えておくれ。できるだけ早く懐かしいお姿を都にお見せになるようにと、そしてお戻りの時には館の内に、御出立の折と少しも違わぬ貞節な妻をご覧になるようにとな。殿にとっては館の優れた番犬、悪意を抱く者にとっては仇敵、そして他のことについても全く変わるところの無い、永い時の間にもその封印を少しも損わなかった妻を⁽⁵⁾。また他人からの非難さるべき噂など、青銅の焼き入れの技術ほどにも私の知らぬこと。このような自慢も、真実に満ちているものであれば、身分の高い女にとって口にして恥ずかしいことではなかろう」(Ag. 598-614)。

アガメムノーンの留守中に、我が物顔に王宮で振舞うアイギストスと王妃との関係は衆知の事実であるから、このことばに含まれる白々しい厚顔な貞婦振りは、誰の耳にも耐え難い偽善と響いたことであろう。王妃のこのようなふてぶてしい開き直ったような態度は、十年の長い歳月を勘定に入れても、帰国したばかりの王の眼に異様に映るほどのものであった。「レーダーの末裔よ、我が館の護り手よ、我が留守中の長さに見合った口上だな、

まことに長々と引き延ばしたものだ。だが程良い讃めことばなら、その栄誉は他の者たちから来て然るべきだ」(Ag.914-917)。帰国した王を歓迎するしるしとして、車から王宮まで導く為に高価な敷物を敷き延べて、その上を歩ませようとする時に王妃が述べる言葉の中に、これまで彼女が曖昧な表現の中に籠めていた真意が一層明確になる。「侍女たちよ、何故愚図愚図しているのです、渡り路を織物で敷き延べる仕事を言い付けてあるのに？ 紫布を繰り上げた道をすぐに作りなさい、望みも設けぬ館の中へと正義の女神が導くようにと⁽⁶⁾。その他のことは睡りにも負けることのない配慮が、正当に、神々の助けによって定められたとおりに、計らうことでしょう」(Ag.908-913)。

東方の専制君主のような脆拝を受け、着衣用の布を地に敷いて歩むことを神々と人間の嫉みを受けるからと憚る王を説きつけて自己の計画どおりに事を運ぶ王妃は、既にこの二人の間の前哨戦ともいべき意志の争いに勝っているのである⁽⁷⁾。アガ「まことに戦いを切望するのは女のすることではないぞ」。クリュ「幸いな方には負けることも似つかわしいのです」。アガ「この争いに勝つことをお前はそれほどにまで重視しているのか？ クリュ「お従いなさいませ、自ら進んでそうなることが勝ちでございますから」(Ag.939-943)。

王はこのような執拗な王妃の説得に屈して敷物の上を歩むことに同意するが、それでもやはり神々の嫉みを恐れて靴を脱いでその上に行く。その後姿を眺めながら王妃が口にす独白は、抑えられた復讐心と怨念がその覆いをはね除けて、彼女の固い決意を顕わにする。「ゼウスよ、願いを叶え給うゼウスよ、我が祈りを聴き届け給え。心してその御旨を成就させ給え」(Ag.973-974)。

・コロスの不安

多年にわたる王の不在を耐え忍び、今ここに勝利を得て凱旋した王を迎えたコロスは、迫り来る危機を予感しつつもその実体を確かに把握することができぬまま、その不安な気持を歌う。

「何故このように長い間
怖れ心がつきまとい
将来を見通して飛びまわるのだろうか、
命ぜられも雇われる事もしないのに
我が歌声は予言をする、
定かではない夢のように

祓いも清めもかなわない
確かな信念が
この胸奥に座を占めている。
時はもう齢を重ねた、
罫綱を引き揚げるときに
浜砂を舞い上がらせて
イーリオンへと遠征の船軍が
急ぎ出で発ったその時から。
帰還の様をこの眼で
しっかりと確かめ我が身を証しにしたい。
琴の調べも伴わずに
復讐女神（エリーニュス）の挽歌を歌う胸の裡に
ひとり習い覚えた我が魂は、
望みを守る勇気すら
今のこの身には既に失われた。
我が心が偽ることはかつて無かった
義しい想いを経めぐらせて
事の成就を想いつつ
心が動悸を拍つ時には。

——
だがこの怖れが虚しくなり、
それが成就せぬように祈るほかはない」。

(Ag. 975-1000)

クロスは一族にまつわる流血の犯罪とその呪いを念頭において、その惨劇が繰り返されることを気遣っているのだが、それを打ち明けることもできずに不安に苛まれている。「もし定められた運命が、神々から与えられた分を越えて取ることが妨げるのでなければ、我が心は舌に先手を打って、このことをぶちまけるだろう。しかし今は暗闇の中で、心は悩み咬んでいる、時宜にかなうことを打ち明ける望みは何も無く、ただ燃え上がるばかりで。」

(Ag. 1025-1034)

・カッサンドラーの予言

王妃の曖昧な、二重の意味を含んだ不吉なことばの中にそれとなく暗示され、番兵とコロスがほのめかす陰鬱な悲劇の気配は、鋭敏な女予言者カッサンドラーによって嗅ぎ当てられて予言として明確に表現される。

カサ「まことに神々を憎む家
身内殺しも数知れず、
人の屠り場 血塗られた床。」
コロス「犬の鼻を持つ異国女
嗅ぎ当てたのは親族殺し」。

(Ag. 1090-1094)

アトレウス家の悲劇の始まりである幼児殺しを鋭い感覚で察知した彼女は、もはやそれを神託の謎めかした表現でほのめかすことをせず、誰にも明らかなことばで示して自分の予言者としての能力を証明しようとする。来るべき惨劇の予言をコロスがなかなか理解しようとしなからである。

カサ「神託は、もはや隠れては置かれまいでしょう、
新妻のヴェールの下から見るようには。
それは明らかに、日の昇る方を目指して
吹く風に暁を打つ波のように。
この苦しみにいや勝る大波がまた襲い来て、
謎によらずに明かすでしょう。
古い悪事の踏み跡を嗅ぎ当てた
私の予言の技の証人となってください。
的を射損じたでしょうか、射当てたでしょうか、
獵師のように巧みな腕前で、
それとも私は作り話を触れ歩く偽巫女でしょうか、
古くから伝わるこの家の罪科を全て知っていると
誓いを立てて証言してください」。

(Ag. 1178-1197)

この劇では、アガメムノーンは王妃の謀みによって、湯浴みの後に袖口と首を縫い綴じた上着を着せられたところを刺されたとされるが、カッサンドラーはそれを獣を捕える狩

網にたとえている。

カサ「え、え、ばばい、ばばい、これは何か。

冥府の投網を眼に見ているのか？

いや殺人の共犯者、閨の伴侶となる狩網だ。

一族の飽くことを知らぬ争いだ、

石打刑の犠牲者に 高く呪いの声挙げよ。

ああ、ああ、それ、それ、

牡牛を離せ 牝牛から、

黒い角をした謀みで

衣の中に閉じ込めて

撃てば倒れる湯槽の中に」。

(Ag. 1114-1128)

・大胆不敵なクリュタイメーストラー (Pantotolmos Clytaemestra)

コロスは神託の謎めかしたことばを聞いて、それがカッサンドラーの哀れな身の上とアトレウス家の過去の犯罪を語っていることまでは理解できても、それがいま館の中で行われようとしている兇行を告げていることは理解できない。そこで彼女は自分が幻視の中で見た状況を語りながら、王妃が実行しようとしている犯行の有様を次第に明らかにしていく。

カサ「かくも大胆不敵な 女の身で果たした夫殺し、

この厭わしい獣を 何と呼べば正しいのか、

双つ頭をした蛇と呼ぼうか、

それとも岩山に棲むスキュラと言おうか、

船乗りどもに禍いを働く怪物と？

吹き荒ぶ冥府の母、容赦なき戦いを

親しい者に吐きかけて 雄叫びを挙げている、

不敵きわまるこの女は 敵を撃退した時のように、

殿の無事な御帰還を喜ぶふりを装いながら」。

(Ag. 1231-1238)

怖ろしい犯罪者や迫害者を忌まわしい獣や怪物になぞらえて呼ぶ例は他にもあるが、こ

ここで夫殺しの犯罪を遂行するクリュタイメーストラーが「何でもやってのける恥知らずな(女)he pantotolmos」と形容され、その行為が「大胆不敵、不遜、短慮、軽拳 tolma」と表現されていることに注目したい⁽⁸⁾。tolmaということばは thrasos と同様に、元来は「勇気、敢為」を意味しているが、悲劇において用いられる時には「大胆すぎて社会と人倫の規範を越える無謀な勇気」を意味する場合がある。それは「正義の讃歌」において「暴勇 thrasos、禍い ate」の連鎖をアイスキュロスが強調していることにもうかがわれる⁽⁹⁾。詩人はそこで不遜 Thrasos を擬人化すらして、その意義を際立たせているのである。

ところでここではその thrasos と語義において殆んど等しい tolma という語が、特にクリュタイメーストラーの性格と彼女の犯罪を表わすものとして用いられているのであるが、それには何か特別な理由があるのだろうか⁽¹⁰⁾。その点を探るためにさらにテキストを読み進めて見よう。

女予言者カッサンドラーはアポロンによって予言の力を与えられながら、その意に従うことを拒んだために、誰も彼女のことばを信じないように運命づけられていた。しかしここでコロスが彼女の事ばを聞いても十分な理解に達しないのは、様々な伏線によって観客に惨劇を予感させながらクライマックスに持っていかうとする詩人の意図によるものであろう。コロス「テュエステースの子供たちの肉の饗宴を、私は聞いて慄え上った。真に迫って偽りの無い話は聞くだに恐ろしい。だが他のことは聞いても、途方に暮れてしまおう」。カサ「アガメムノーンの死を見ることになるだろうと私はあなたに言っているのです」(Ag. 1242-1246)。

これほど明確なことばで言われても未だ彼女の言うことを信じようとしめないコロスが、やっと異常事態に気づき、カッサンドラーの予言が真実を告げていたことを悟るのは、王宮中から聞えて来る王の苦悶の叫び声を耳にした時である。アガ「うわーっ、急所にずぶりと一突き喰らったぞ」。コロス「静かに、急所をやられたと叫んだのは誰だ?」アガ「うおーっ、また二突き目をやられてしまった」。コロス「あの謀みが果たされたものと見える、王のあの叫び声からすると。おい皆な、何か安全な計略が無いか相談し合おうではないか」(Ag. 1343-1347)。

・王妃の正義とその暴勇 thrasos

王暗殺の目的を果たして王宮から出て来たクリュタイメーストラーは、もはやその意図を包み隠しておく必要性が無くなったために、勝利に酔って積もる心の怨念を堰を切った

ように存分に述べ立てる。勝ち誇り傲り高ぶった彼女のことは、そのまま彼女の滅びをも予告する。

クリュ「その時まかせに以前に言った多くのことと、
正反対のことを言っても私は恥とは思いません。
そうしなければどうして人は、友と思われている敵に対して
敵対行為を用意し、跳び越えることもかなわぬほどの高さの
禍いの罫を張りめぐらし得ましょうか？
私にとってこの闘争は思いもよらぬほど古くからの
ものではありませんが、昔からの争いがやって来たのです、
ずい分遅くなってではありますが」。

(Ag. 1372-1378)

そして彼女はアガメムノーンの死の様を語りながら、思わず口が滑って不敬なことばを口にする。「そして倒れてしまった彼に更に三度目を撃ち下ろしました。地下に在す死者の救い主なるゼウスへの感謝の捧げものとして⁽¹¹⁾。のようにして倒れながら彼は自分の生命を喘いで出しました。そして傷口から烈しく血を噴き出して、私に血しぶきの黒い雨を打ちつけましたが、生長する時の芽吹こうとする穀物が、神の与える慈みの雨を喜ぶのにも劣らず、私は嬉しく思いました」(Ag.1385-1392)。

国王の弑虐という変事をやっと理解したコロスが、その犯罪を誇り顔に報告する王妃を驚き呆れながらも諷めることばの中に彼女の罪の本質が鋭く指摘されている。コロス「あなたの言葉には私共は驚きます、なんと大胆な口を利くことか、自分の夫に対してそのようなことばを高言 *kompazein* するとは」⁽¹²⁾(Ag.1399-1340)。この「大胆な口 *thrasu-stomos*」とは「勇気、暴勇、軽率、向う見ず *thrasos*」と「口」との複合語であり「大胆不敵な言い方をする」という意味でここでは用いられているが、「正義の讃歌」の中で「戦うことも抗うこともかなわぬ神霊 *daimon*、不敬なる *thrasos*」(Ag.768-769)と強調されていたことと考え合わせると、やはり「傲慢 *hybris*」から生ずる「迷妄 *ate*」の一つの形であると考えざるを得ない。王妃のこの常軌を逸したような思い上がったことばも、自分が「正義の執行者」であるという確信から出たものであるということは次の表現から分る。クリュ「私を弁えの無い女のようにお前たちは試みようとするのだね、しかし私は怯まぬ心をもって知っている者たちに言おう。この男がアガメムノーンなのだよ、私の夫、だがこの右手の働きで死骸となっている、正義を執行するこの右手によって。こういう次第なのさ」。

(Ag.1401-1406)

このような「正義の執行者」としての王妃の確信に対してコロスは「あなたは大層な野心家だ(megalo-metis)、高慢至極に(periphron)喚きなさる。まるで血に染みた運命に心が狂っておられるように、血のしたたりが眼にはっきりと現われておりますぞ。」(Ag.1426-1429)とたしなめ、その罪の報いとして仕返しを受けるだろうと予告する。それに答えてクリュタイメーストラーは「私は娘の成就された正義 dike と、迷妄 ate とエリニウス復讐鬼にかけて、その神々に対して私はこの男を屠ったのだが、私の館に恐怖の思いが足を踏み入れることは決してない」(Ag. 1431-1434)と豪語する。ここで一層明らかになるのは「正義」が「報復」と同義語であり、「アーテー、エリーニウス」の姿を変えたものと表現されていることである⁽¹³⁾。

夫である国王の死骸の傍に立って自己の行為を得々と誇らし気に弁明するクリュタイメーストラーの姿を、コロスは「忌まわしい鴉」にたとえ、王の暗殺に用いられた縫い閉じた衣を「蜘蛛の巣」になぞらえて王の悲運を嘆く⁽¹⁴⁾。コロスが一族の呪いの象徴である「神霊 daimon」に言及すると、クリュタイメーストラーはそのことばを取り上げて自分の行為の必然性を主張するために用いる。

クリュ「この仕業を私が為したと言い張るのか?

私はもはやアガ멤ノーンの妻などではない。

ここにある屍の妃となって

古えの恐ろしい復讐鬼 Alastor は

酷い宴を設けたアトレウスの

仕返しを果たしたのだ、

幼児になり代って全き犠牲を捧げたのだ」。

(Ag.1497-1504)

自分の為した行為のあまりの忌わしさに、それを復讐霊の仕業であると強弁する王妃に対して、コロスは彼女が責任を免れることはできないと反論する。しかし彼女は王がイーピゲネイアを謀みによって家から誘い出して犠牲にしたことを持ち出してその「当然の報いをこうむった axia drasas axia paschon」(Ag. 1527)と主張する。彼の剣による死は自分の行為の償いであるというのである。だがコロスはそのことばを受けて、王妃の弁明が正に彼女自身の滅びを準備することを予告する。

コロス「思い惑うのは我が心

思案の道も絶え果てて
いずれの方へ向えばよいのか、館の倒れ崩れる時に。
土台揺がす嵐を恐れる
血しぶきははや嵐となって荒れ狂い、
新たな悪事に備え 裁きの刃を砥石に当てて
運命 Moira はまた研ぎ澄ましている」。

(Ag. 1530-1536)

これに続いてコロスは「咎める者は咎められ、殺した者は償いをする」(Ag.1560-1562)と、この劇の主題である「為した者は仕返しを受ける drasanti pathein」(Ch. 313)という報復の正義を繰り返すが、クリュタイメストラはその報復行為の悪循環をこの事件かぎりで終りにしたいという願いを述べる。「ところで私はプレイステネースの一族の神霊と誓いを交わして、これで満足しようと思う、耐え難いことではあるが。今後は別の家に行って同族殺して消耗させるようにと」(Ag.1568-1573)。自分は現在残っている僅かな幸せで満足して暮らしたいと彼女は述べるが、それが一人よがりな望みであることは、コロスのことばのみならずこれまでの彼女の主張そのものが暗示している。

まとめ

一読して視野の下に収めるには余りにも長大で複雑な構成を持つ「アガ멤ノーン」は、「アウリスのイーピゲネイア」と「カッサンドラーの死」のエピソードと、「アガ멤ノーン暗殺の物語」とに分けて読むと理解し易いという考えから、クリュタイメストラの陰謀事件と彼女の性格に焦点を当てて劇を見て来た。その過程で明らかになったことは、この劇のプロローグや前半に充満する不安と陰うつな重苦しい気分は、王妃の企む陰謀と彼女の特異な性格が原因となっているということである^{註15)}。

迫り来る惨劇の予感、陰謀の進行に気附いている番兵によって、漠然とながら事情を知る者には悟られるように表現される。長老たちから成るコロスにはその言葉の持つ意味がはっきりとは理解できないが、彼らは待ち望んだ勝利の報せにも心弾まずに重苦しい不吉な感情に包まれたままである。アガ멤ノーンに伴われてやって来たトロイアの王女カッサンドラーは王宮に充満する死の臭いを鋭く嗅ぎつけて兇行を予言するが、その意味もコロスには伝わらない。彼女がアポロンの怒りによって予言を信じてもらえない運命にあることが一因ともなっているが、むしろ事件が眼前で起るまでその真相を知らぬままに

漠とした不安にコロスが包まれていることが、この悲劇の構成上必要であったためであろう。あらゆる状況が全て整い時期が熟し切ったところで王の暗殺が決行されるというその劇的高揚を盛り上げるためにも、コロスの不安と不吉な予感という設定は必要だった。

その構成の中で、コロスが真相を理解せぬままに不安の気分を高めていく為には、王妃の性格づけが重要な要素となっている。トロイアの陥落の報告を聞きながら一人満足そうに心に期すところのある様を見せる時、勝利を祝って駆けつけた長老達に曖昧な表現で陰謀を匂わせる時、王に先んじて到着した伝令のことばを受けて勝利に傲る者の破滅をほのめかす時、そして正に帰還した王アガメムノーンを出迎えた時の長々しい自信に満ちた挨拶の端々に潜む陰険な表現、また寄るべなき捕虜カッサンドラーに対する尊大な扱い、それらのことばと態度の随所に、この悲劇の緊張を高めていく王妃の性格づけのための詩人の配慮の跡がうかがわれる。

そして最後に、王の暗殺を果たした後に王妃が勝ち誇って語るその兇行の描写そのものの中に、彼女の多年にわたって積った怨念とその勝利の解放感の強さを知ることができる。彼女は自己の怨念と行為の正当性を主張する余りに自らを「エリーニュス・アーテー・アラストール」という復讐霊の化身であるとまで言い募るのである。この王妃の強烈な自己主張とその比類なき個性を評してコロスが「あらゆることを敢行する pantotolmos」と述べているが、これこそクリュタイメーストラの性格を描写するのに最もふさわしい評言であると思われる。

ギリシア語の *tolma* ということばは、*thrasos* と共に元来は「勇気」という意味を持っているが、また同時に「軽挙、向う見ず、暴勇」という意味をも有している。神の正義が我が方にありと信じて神に代って敵を罰する行為は、社会秩序の完備しない英雄時代には美德の一つであったが、市民社会が成熟し個人の争いを個人で解決せず社会の責任に委ねるという知恵を持つ時代にあっては、自らの手で正義を執行する行為は「勇気」ではなく「暴勇・蛮勇」であった。神々に代ってトロイアを討ったアガメムノーンが、その徹底した暴力行為の故に滅びたように、娘に代って一族に伝わる報復の霊の化身と身を為して仇を討った王妃も同様な罪を犯し、遂には我が子オレステースによって報復を受ける。彼女の自己の行為に対する弁解そのものが自己の破滅を暗示し用意することになるのであるが、この劇に描き出された王妃の姿は、英雄時代には女性たちも男に劣らぬ激しい性格と気性を持ち合わせていたことを雄弁に物語っている。

註

- (1) 池田黎太郎:『アガ멤ノーン』における「正義の讃歌」と戦争観、順天堂大学体育学部紀要、第 28 号、15-22、(1985)
- (2) 池田黎太郎『アガ멤ノーン』の「前書き」、カッサンドラーへの「憐憫」について、『エポス』第 9 号、37-50、(1985)
- (3) このことばがアガ멤ノーンに対するクリュタイメーストラの復讐心を意味することは、Page も指摘している。(Page, *Aeschylus Agamemnon*, p.82)
- (4) この「滅びた者たち」はイーピゲネイアをも含むと Page は言うが、筆者はこれを一族の争いで滅びた者すべてを含むものと解する。(以下引用箇所註参照)
- (5) この表現に籠められた皮肉な響きについては、Page も Fraenkel も指摘している、
- (6) 表面上の意味は「正義の女神」が王を館の中へ連れて行くというのであるが、王妃の真意は「復讐の女神」が彼を破滅に導くというのである。cf. Page。
- (7) アガ멤ノーンが征服した東方の専制君主と同じ不遜な行為を行わせようと王妃は謀んで執拗に彼を説得する。(Lattimore, *Introduction to the Oresteia*, p.79)
- (8) クリュタイメーストラの性格を、ふつうの *pan-tolmos*(大胆不敵な、恥知らずな)ということばではなく、*panto-tolmos* ということばで表現したのは、響きの強さによって意味をも強調しようとした詩人の特別な配慮によるものと理解する。全軍の強要によってアガ멤ノーンが心ならずも娘を犠牲に捧げた後では、彼も *panto-tolmos* な気持ちに心を変えたと描写されている。(Ag. 221)。
- (9) 池田黎太郎:「正義の讃歌」、p. 18。
- (10) この点については既に筆者が簡潔ではあるが指摘してある。アイスキュロスの *Oresteia* におけるディケーについて、西洋古典学研究、第 17 号、24-25、(1969)。
- (11) ふつうは Zeus soter「救い主ゼウス」に捧げるべき三度繰り返される渾きを、「死者のゼウス」であるハーデースのために三度王の身体に刃を揮うのである。
Page, Fraenkel.
- (12) Kompazo (大言壮語すること)が滅びにつながる点については既に筆者が論じてある。「テーバイに向う七将」の技巧、『エポス』、第五号、48-50、(1980)。
- (13) 三体の神々にかけて誓いを立てるのがギリシア人の慣わしであったが、このように「正義」、「アーテー」、「エリーニユス」と並べたところにこの劇の特徴がある。
- (14) アイスキュロスがその劇で、敵役を醜悪な獣などにたとえる比喩の用法については、

- 筆者の論文参照。『救いを求める女たち』、順天堂大学紀要、第 21 号、18、(1978).
- (15) アイスキュロスの『アガメムノン』にみなぎる不安の気分と正義の争いについては川島重成、「終りへの期待と不安』参照。